

「夢」をもち、「夢」に向かって努力する生徒

# 原北中学校 学校通信



令和 2年11月13日 第13号

福岡市早良区小田部7-11-1

電話 092-851-3344

発行者 校長 福崎 浩信



## 三年生第二回進路説明会から・・・

近年、公立高校、私立高校ともに、多様な能力が発揮され、個性をもったやる気のある生徒が活かされる環境作りを第一義に、入試改革や学科編成、授業改革が行われています。



高校入試制度改革については、これまでも、9教科から5教科だけの試験になったり、英語、聞き取りテストが始まったり、40点満点が60点満点になったりするなど、時代に合わせて大きな変更がなされてきました。特にここ数年は、大学入試制度の変革の時期にあって、大きな過渡期となっています。

福岡県立高等学校入学者選抜学力検査については、平成27年と、平成28年に、学力検査の改善について」の通知がなされています。「何を知っているか、何ができるか」という個別の知識・技能だけではなく、「知っていること・できることをどう使うか」という思考力・判断力・表現力等や、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という学びに向かう力や人間性等について、身につけるべき資質・能力が身につけているかを問う選抜方法にシフトしています。



試験問題用紙・内容については、平成28年度から、これまでのA3用紙2枚からA4冊子へ、出題方法は、一方的な問いかけから、対話形式へ進化し、更には、短答・選択からの脱却が進み、記述式が急速に進んでいます。平成30年度からは、各教科、検査時間が5分延長され、知識の再生、単純処理が少なくなり、思考力・判断力・表現力を問う問題の割合が更に多くなっています。また、読み取る力を重視した問題が一層重視されるようになり、各教科とも問題に占める総字数が増えています。

近年、特に、思考力・判断力・表現力を問う問題に対応するために、説明する力、つまり、①事柄・事実を説明する力、②方法・手順を説明する力、③理由を説明する力の育成を意識した授業を行っているのは、上記のことが背景にあるからです。



## 道は開ける(成せばなる) 「思考の整理学「手帖とノート」・・・外山滋比古」

平成20年から令和元年の12年間に東大・京大ともに7度もの年間文庫ランキングを獲得した外山滋比古（とやましげひこ）さん【令和2年7月30日96歳で逝去】の「思考の整理学」の中から「手帖とノート」の冒頭を紹介します。

『何か考えが浮んだら、これを寝させておかなければならない。ちょっと頭の片隅に押しやっておく手もあるが、ひょっとすると、そのままガラクタとともに消えてしまいかねない。忘れないようにするにはするにはどうしたらいいか。記録しておく。これが解決法である。書き留めてあると思うと、それだけで安心する。それでひととき頭から外せる。しかし、記録を見れば、いつでも思い出出すことができる。考えたことを寝させるのは、頭の中ではなく紙の上にする。』

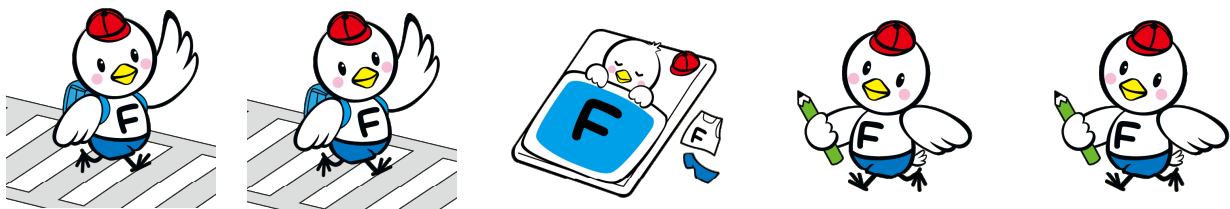
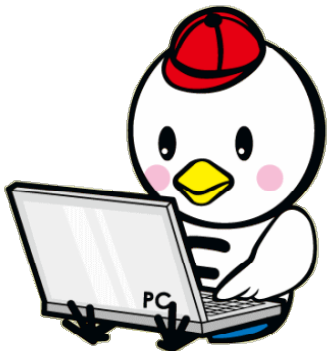


その時はさほどではないと思われることでも、あとあと、どんなに素晴らしくなるかしれない。書いておかなかったばかりにせっかくの妙案が永久に闇に葬られてしまうということになっては残念である。そして、考えは机に向かっているときに表れるとは決まっていない。』

本を読み終えたとき、初任の頃、先輩の先生から指導を受けたことを思い出しました。

『三上（さんじょう）という、千年ほど前に中国に起源がある言葉がある。考え事をするのに最も適した場所と言われてきた。馬の上と書いて「馬上（ばじょう）」、枕の上と書いて「枕上（ちんじょう）」、厠（かわや）の上と書いて「厠上（しじょう）」、これら3つを合わせたものである。』

それ以来、数十年、車の中、トイレ、枕元、庭掃除をする際の胸のポケットには付箋とボールペンがあります。



池谷裕二・糸井重里の「海馬 脳は疲れない」（新潮文庫）もお勧めの一冊です。

【概要】脳と記憶に関する、目からウロコの集中対談。

「『もの忘れは老化のせい』は間違い」「30歳を過ぎてから頭は爆発的によくなる」

記憶を司る部位である「海馬」をめぐる脳科学者・池谷裕二のユニークな発想と実証を、縦横無尽に広げていく糸井重里の見事なアプローチ。脳に対する知的好奇心を満たしつつ、むしろオトナの読者に生きる力を与えてくれる、人間賛歌に満ちた科学書。